



ヤベアベ学級

アート
ワークショップ
博物館部

|との

12月



目次

- 4 初回ミーティング
- 5 はじめの計画
- 6 斎藤清美術館で
- 8 西澤さんとヒアリング
- 9 中津川さん、佐野さん、森内さん。
- 11 アーティスト決定後に変更した計画
- 12 ワークショップ①
博物館でどんなとこ
- 14 ワークショップ②
佐野さん・大江さんと博物館
- 18 ワークショップ③
佐野さん・大江さんと博物館BOXを作ろう
- 22 ワークショップ④
中津川さんと博物館
- 26 ワークショップ⑤
中津川さんと絵を描こう
- 30 映像作品 ポリフォニックミュージアム
関わってくださった方からのメッセージ
 - 32 中津川浩章さん
 - 34 佐野美里さん
 - 35 大江ようさん
 - 36 杉本 雅昭さん
 - 37 矢部 翔太郎さん
 - 38 阿部 美由紀さん
 - 39 岡部 兼芳さん
- 42 事務局より



ヤベアベ学級

アート
ワークショップ
博物館部 | との

12月

アートワークショップ「博物館部」が目指したのは
ミュージアムにおけるポリフォニックスペースの創出。
様々な声に耳を傾ける空間（ポリフォニックスペース）を各地に生み出すことを目的とする
「ポリフォニックミュージアム」の基盤のような事業です。
福島県立博物館でまだ聞くことができずにいる声とお近づきになりたい。
できることなら福島県立博物館を楽しんでる声を聞きたい。

これまでに連携事業をご一緒していただいたことがある
福島県立会津支援学校に相談してみました。
支援学校の生徒さんたちに「行きたい」と思ってもらえる場に
博物館はなれるでしょうか。

高等部2年4組の3人の生徒にご一緒いただけることになり3人を知ることからスタートした活動は、
先生や担当に入ってくださいました3人の実行委員会委員、
講師を引き受けてくださった3人のアーティストなど、
たくさんの方とのミーティングを重ねながら進みました。

博物館と支援学校を行ったり来たりしながら、
3人の生徒の障がいの特性に応じた表現方法を発見し、
3人の中にある言葉にならない言葉を表現として引き出し、形にする。
そしてそのプロセスを丁寧に拾いながら映像作品として残し、伝えることで
多くの方の障がいへの理解を深めてもらうことができるのではないかと。

いくつもの長いミーティングを重ねて生まれたワークショップ「ヤベアベ学級との12月」。

3人の生徒の個性がキラキラと作品上に輝き、
3人の豊かな表情と表現、関わる大人の戸惑いと驚きと喜びが映像となりました。

3人の生徒の声が、3人に振り回される楽しい時間を味わった大人の声
博物館内に響いた12月。
多様な声があることにそのままだることの幸せを教える時間となりました。

00

初回ミーティング

DATE 9/24

PLACE 福島県立博物館

参加者

伊藤達矢（東京藝術大学特任准教授）

西澤真樹子（NPO 法人大阪自然史センター職員）

岡部兼芳（はじまりの美術館館長）

川延安直（福島県立博物館副館長/LMN実行委員会事務局）

小林めぐみ（福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局）

江川トヨ子（福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局）

塚本麻衣子（福島県立博物館学芸員/LMN実行委員会事務局）

多くのアート・プロジェクトは、「目的」を設定し、それに向かって年度ごとに「何をするか」を考えて組み立てていきます。ひとつひとつがオーダーメイドなのです。しかしながら、「どのように組み立てられるか」という過程は、報告書などの“後から見える形”に残りづらいものです。この部分こそ、残す必要があるのでは？と博物館部は考えました。というわけで、博物館部の裏側もレポートしていきます。

今回、これまで福島県立博物館が積極的に関わって来られなかったひとたちにも安心して来てもらえる場になりたいと動き出しました。いろいろな違う背景を持つ人たちに博物館の方からまずは近づいてみる。どうしたら「ここにいてもいいかな」と思ってもらえるか、居場所になるってどういうことか。博物館部の手探りが始まります。

最初に参加してもらうのは支援学校の生徒さんたちです。「まずは偶然を装って陰から見守りましょう」はまるで探偵のようですが、手探りの最初の一步なのです。

アートワークショップ「博物館部」には、ライフミュージアムネットワーク実行委員会委員のうち東京藝術大学特任助教の伊藤達矢さん、NPO 法人大阪自然史センター職員の西澤真樹子さん、はじまりの美術館館長の岡部兼芳さんに参加していただきました。「博物館部」を何のために、誰と、何を、どのように行なうのか。事務局（福島県立博

物館）からの「何のために（誰もが過ごしたくなるミュージアムになるために）」、「誰と（会津支援学校高等部 2 年 4 組の 3 人の生徒と）」の案をベースに、「何を」「どのように」行なうかのプランを委員の 3 人と話し合うオンラインミーティングから活動がはじまりました。ミュージアムを開いて楽しむプロフェッショナルの 3 人は頼りになる先輩です。

ご一緒してくれる会津支援学校 2 年 4 組の 3 人にとってベストなプランを練り上げていくため、まず行うのは「相手をよく知ること」という結論に至った初回ミーティングでした。

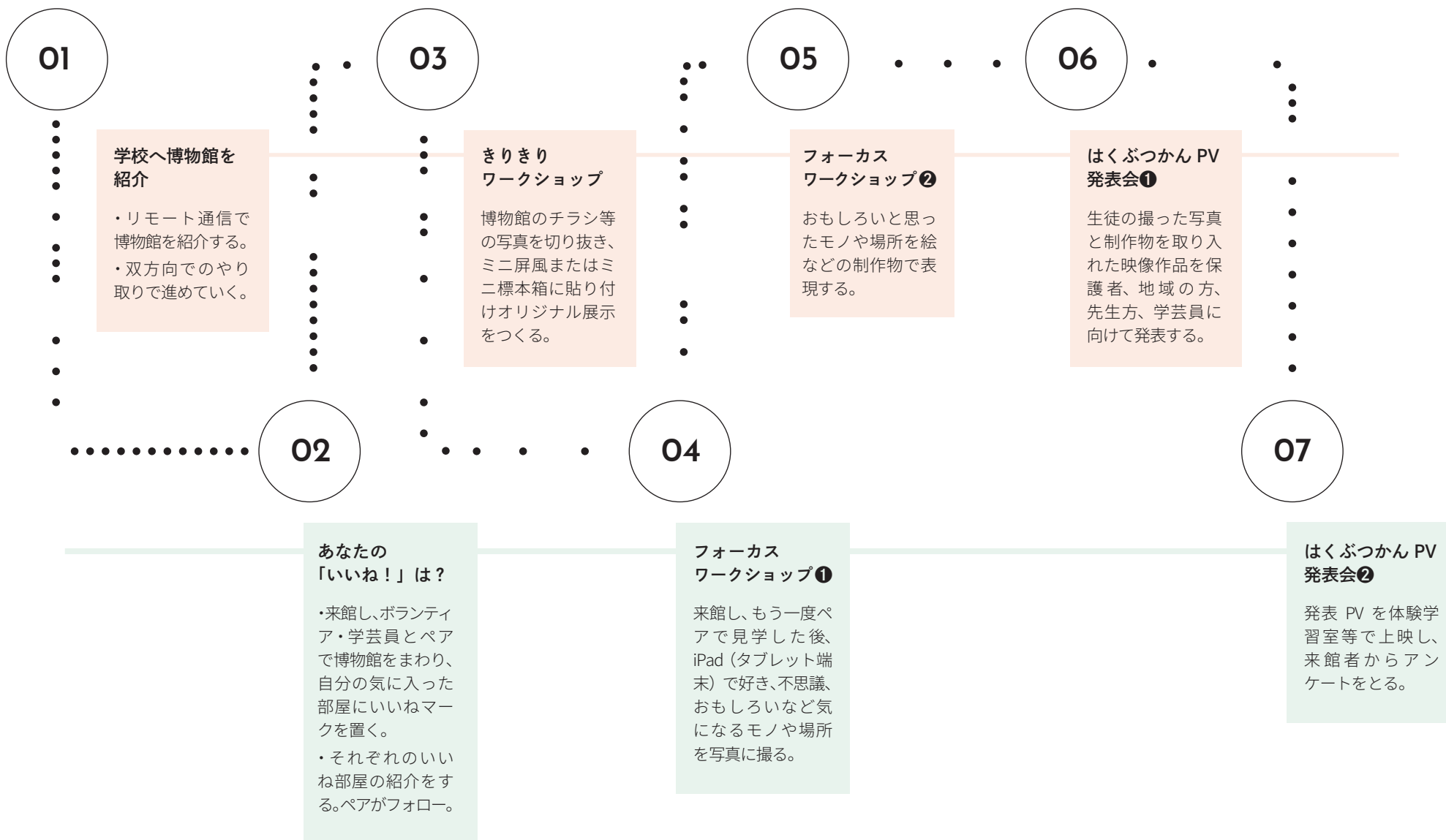
がんばれ！
博物館部

① 2021年9月24日



はじめの計画

博物館部はまず、支援学校や実行委員会と相談して道すじを作りました。
プロジェクトを進めるなかで、学校や生徒さん、アーティストのみなさんと作り替えていきました。



01

齋藤清美術館で

DATE 10/22

PLACE やないづ町立齋藤清美術館

参加者

伊藤達矢
西澤真樹子
岡部兼芳
江川トヨ子
塚本麻衣子



今日は支援学校の生徒さんたちが柳津町にある齋藤清美術館を見学する日です。博物館部は生徒さんたちがどんな様子で見学しているかこっそり見守りました（学校側と相談の上です）。なるべく日常の様子を知るための作戦でしたが、いつもの教室ではなく美術館の見学だったことから、入りやすくするための移動の導線や、新しい場所に対するイメージをもちやすくするための準備や支援が必要、と博物館に来てもらうイメージを持ちながら考えることができました。

会津支援学校高等部 2年4組の3人について、担任の矢部先生、阿部先生からオンラインミーティングで教えていただきました。3人のそれぞれの障がいの特性、得意なこと、不得意なこと。けれどまだまだ「博物館部」には3人の姿をイメージの中で結べません。会津支援学校の杉本副校長先生をお願いして3人の様子を見せていただくことにしま

した。折よく、校外学習で柳津町の齋藤清美術館に出かけることを教えていただきました。なんとという幸運！ミュージアムで3人がどのように過ごすのか、そおっと遠くから、不自然じゃなく近くから知ることができました。なかなか美術館に入れなかった一人がどうして入れなかったのかを考えはじめた時、一人一人と向き合う心構えが生

まれたような気がします。この頃から、2年4組を「ヤベアベ学級」と呼ぶようになりました。



◀左：斎藤清美術館の中へ。
右：展示室での生徒さんの
様子をそっと見守ります。



▲視線の先に、今回アートワークショップに参加してくれる生徒さんと先生がいます。



◀上：展示室は、他の学校の生徒さんもいてにぎわっていました。
下：今日の生徒さんたちの状況を伺います。



福島県立博物館で斎藤清美術館に同行▶
して見えてきたことを振り返りながら
今後についてのミーティング。

02

西澤さんとヒアリング

DATE 11/9

PLACE 福島県立会津支援学校

参加者

西澤真樹子

川延安直

江川トヨ子

がんばれ!
博物館部

2021年11月9日



支援学校の教室にお邪魔して、先生に生徒さんたちのいつもの様子を伺いました。どんなことが得意か、どんなことが苦手か。伺ったことを持ち帰り、いっしょに博物館でどんなワークショップができるかを考えます。

「学校ではどうしても社会の中に馴染むために学ぶことが多いけれど、そういうことから離れた経験をできるのも今しかない。芸術や表現するという、学校教育ではなかなかできないことに触れさせてあげたい。」という先生のお気持ちを聞くことができました。

ワークショップの内容を実現可能なものにしていくためには、まだヤベアベ学級の3人についての情報が足りない感じがしていました。学校での様子も知りたく、3人のことをよく知る矢部先生に改めて支援学校でお話をお聞きました。

ヒアリングに同行してくださった西澤真樹子さんは、大阪市立自然史博物館を拠点に障がいのある子どもたちとミュージアムを

楽しむ事業をしています。それはミュージアム機能をどのように拡張し、誰にでも届けるようにするかの試行と理解しています。ヒアリングでは、そんな取り組みをしている西澤さんだからこそのアイデアが次々と出てきて、手応えを持つことができました。いくつもの可能性から今回の事業の案に絞り込んでいくのが次のステップです。

04

中津川さん、佐野さん、森内さん。

DATE 11/22

PLACE 福島県立博物館

参加者

中津川浩章さん（美術家）
 佐野美里さん（彫刻家）
 森内康博さん（映像作家）
 矢部翔太郎さん（福島県立会津支援学校講師）
 岡部兼芳
 川延安直
 小林めぐみ
 江川トヨ子
 塚本麻衣子

今回、参加していただける生徒さんたちの様子に合わせて企画を作っていたため、ワークショップをしていただく作家さんの選考も同時進行で進めました。スケジュールがなかなか合わなかったのですが、二人の作家さんに二つのワークショップを組んでいただくことで調整できました。美術家の中津川浩章さん 彫刻家の佐野美里さんです。そして撮影にはらくだスタジオの森内康博さんに入ってくださいます。

中津川さんにワークショップの大枠を組み立てていただき、その枠をもとに細かい打ち合わせをしていきます。

「興味を持ったところに反応してくれる〈瞬間〉を捉えてほしい。」と、佐野さん。

「彼らがどんな〈世界〉を生きているのかを記録して、伝えられたらすごくいいよね。」と、中津川さん。初顔合わせでぐぐぐっと森内さんの肩に乗る責任が大きくなったのです。

ヤベアベ学級の3人を知るほどに、事業の最初に立てた「会津支援学校と福島県立博物館を行ったり来たりする」というスキームの難しさが実感されてきました。それでもミュージアムを誰にとっても過ごしやすい場所にするという「博物館部」の目的に近づくには、学校と博物館との行ったり来たりを諦めるわけにはいきません。実現するためには「はじめの計画」で考えていたワークショップの内容の再検討が必要そう

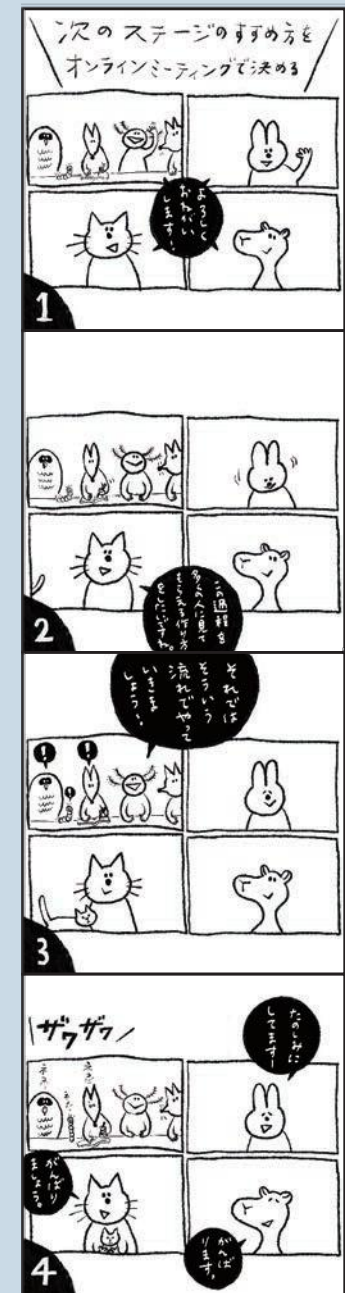
です。ワークショップを一から考え直す前提で、同時進行で講師役となってくれるアーティストへの相談をしていきました。美術家の中津川浩章さんは障がいのある方とのワークショップのプロフェッショナル。これまでご縁のあった福島県立博物館からの相談に応じてくださいました。彫刻家の佐野美里さんは支援学校で美術を教えた経験の持ち主です。仕事ぶりをご存知の

岡部兼芳さんからのご推薦でした。ワークショップの様子を事業趣旨が伝わる映像作品として残すために伊藤達矢さんが映像作家の森内康博さんを紹介してくださいました。「博物館部」のネットワークで集まってくださった中津川さん、佐野さん、森内さん。オンラインでの打ち合わせでは、「どうワークショップをやるのか」だけでなく「何のためにワークショップを行い、映像を残すのか」までを議論しました。

がんばれ！ 博物館部

⑫

2021年11月22日



中津川さん、佐野さん、森内さんに参加していただいたオンライン・ミーティング。「何のために」「どうして行うのか」を議論するなかで交わされた言葉の一部をご紹介します。

中津川さん：この体験を通じて自己肯定感をつける。表現することで他者、社会と繋がる。その一つのきっかけ作りがとても重要。その結果としての共有が大切で、賞賛は最後かな。賞賛されるために物を作るわけではないので、そこをゴールにしてしまうと成果物を社会の価値に合わせるというふうに逆算することになっちゃう。そうするとこのワークショップの目的である自己表現、障がいのある人たちの内在する言葉を形にするという着地点とずれてしまう可能性がある。

佐野さん：得意なことと苦手なことがはっきりあると思ったので、ワークショップを進めていく中で、それぞれがちゃんと楽しむ、それぞれが得意なことを発揮できることを大切にしなければいけない。一斉に同じことをしようではたぶん楽しめない。

中津川さん：一般的に支援学校はガードが固い。顔出しNGのところがほぼ80%。でも、会津支援学校でワークショップをやった時に、ガードが結構低いと思った。もう信頼関係がかなりあると思った。杓子定規に全部駄目ではなくて、このプロジェクトでこの人たちだったら安心してきて、大丈夫というところが強いのだと思う。言葉を尽くしてコンセプトをしっかりと共有して行ったほうがいい。文章に残すのも大切。

中津川さん：何に興味があるかは言葉で返っ

て来ないので、一緒にいる人は彼らの目線、眼差し、体の向き、そういうことを気にしながら、自閉症の子って好きなものと視点止まって、ずっと見ていたりするので、それを捕まえてどういうことに興味があるのか引き出していく。対話になれば対話して、どこが好きなのか、どういうところが気に入ったのか、だんだん具体的に掘り下げていく。それをみんなでメモしながら共有していく。

中津川さん：障がいの重たい子たちは1回で完結している可能性が高いです。そこに足し算して階段のようにステップアップするのは難しい。出来た作品に加筆、修正はほぼやらない人たち。ただ意識は変化していくので、意識の変化を捕まえるのがファシリテーターの本当の役割です。

感覚が深くて過敏な人が多いので、風とか気圧、匂い、いろんなものに反応している。そういうことを僕らが察知しながらプログラムを進めていくのが大切。メソッドよりもその時の対処の仕方が変わるといのが今回のキーポイントです。

佐野さん：例えば、建物に入った時、壁の質感が好きになる子もいるかもしれない。私たちは展覧会を見るという作業をするけど、彼らにとっては新しい場所そのものが作品だと思う。成果物として出来上がってくる作品が「博物館の壁」ってタイトルになるかもしれない。

中津川さん：今回の成果物というか最終的な作品は、どちらかというと映像作品が主体になります。子どもたちが何に興味があるのか、留まったり、わからない言葉を発したり、オウム返ししたりということをちゃんと拾って形にすることが、作品化の大きなポイント。

あくまで作品は二次的なもので、プロセス

の記録が重要で、そこに社会との繋がりとかが障がい特性の理解が入ってくる。作品を作らせるよりは、子どもたちがどういう興味を持っているのか、可愛い仕草、反応を見ることのほうが、こんなすごい作品を作っ

てすごいねよりも実は大きいと思う。

中津川さん：一般的に評価される作品を無理やり作らせるのではなく、彼らの感覚が形になるまでをキャプションとか映像も含め、そのプロセスを記録して世界に発信することが大切だと思う。障がいのある人たちの作品の魅力って実はそこに潜んでいることが多い。

佐野さん：標準箱に宝物を採集する感じで動けたらいいかなと思っています。虫取り網で素敵な何かを捕まえるみたいに、彼らから出ている言葉じゃない何かを残さずキャッチして箱に仕舞っていくみたいな感覚。

矢部さん：作品化しないものを作りたいと思っていました。本人たちの本当に思ったこと、本人たちができること、できる力でやるのがいいなと思った。学校教育だと評価するために教育する。教育の上に評価をつけないといけない。今回はアーティストの方がいらっちゃって、実績と後ろ盾がある。作品っぽく見えなくても、そういう思いで本人が感じたものであると伝えられるので、すごくやりたかったです。

中津川さん：作品というのではなく、もっと広げて、彼らの表現を拾っていく。博物館が意図した展示物を見て表現するのではなく、違うところを見ている可能性が強いと思う。スルーされちゃう。僕らが見せたいものには興味がなく、全然そうじゃないところにすごく興味をもって近づいていく。その辺は大丈夫ですよ。

小林：大丈夫です。展示を見てというより博物館を好きになってもらいたい。博物館の植え込みでも入口の何かでもエントランスホールでも壁でもいいです。展示じゃなくても構わないです。

佐野さん：生徒さんたちにまず安心して安全にやってもらいたいです。大人も生徒もみんな楽しい雰囲気、楽しい時はもう素直に楽しいと笑って、人間らしい表現をバシバシ出していけたらいい現場になると思っています。

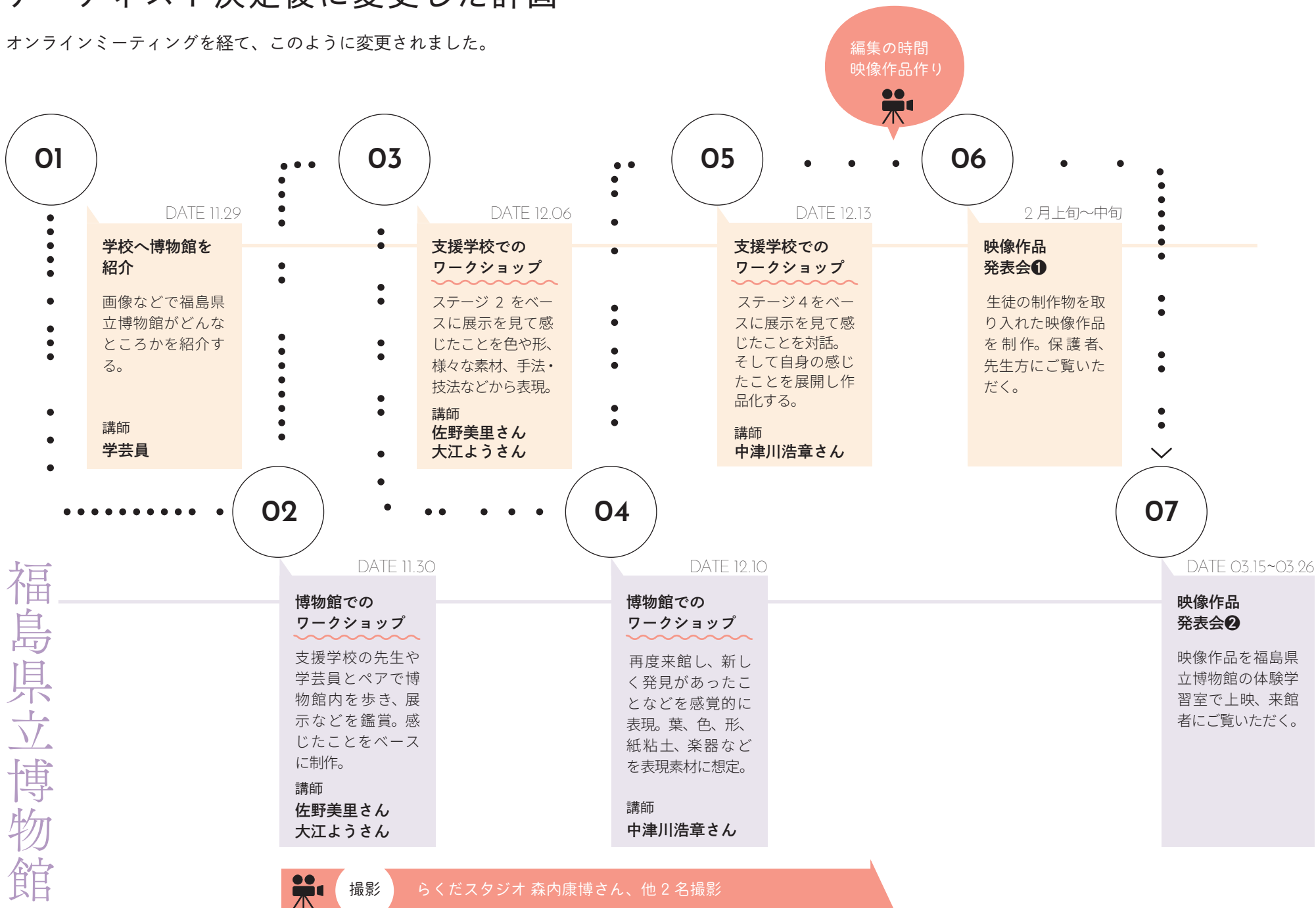
中津川さん：障がいのある人たちのアート作品を最近はいろんなところで見ます。作品だけ見て分かったつもりになっている人が多い。障がい特性も生きづらさも全然見ていなくて、作品だけいいねって消費して、自分の懐に入れちゃうみたいところがある。作った本人がどういう感覚を持って生きているのが意外に共有されていない。そこで差別、区別、間違った合理的配慮が起こる。こういう機会を通じて作品だけではなくて、そのプロセスを通じて彼らがどういう世界で生きているのかを共有するのはすごく意義があると思う。僕はいい作品を作らせるよりもそのプロセスが社会化して、みんなに知ってもらおうというところ、それはもちろん作品作りを通じないと発信できないので作品も大切だけど、そこにポイントを置いて関わりたい。

川延：博物館では、いろんなものたちがたくさん集まっている場所の空気みたいなものを味わっていただければと思います。一個一個のものをしっかり見てレスポンスするというのではなく、歴史、時間の積層している場所に立った時にどんな感じがするかを生徒さんたちに味わってもらいたい。勉強という感じでなく進めたいと思います。

“作った本人がどういいう感覚を持って生きていっているのかが意外に共有されていない。”

アーティスト決定後に変更した計画

オンラインミーティングを経て、このように変更されました。



DATE 11/29

PLACE 福島県立会津支援学校

撮影：森内康博さん+らくだスタジオ
講師：江川トヨ子

「当日の流れや関わる人たちのことを、生徒さんたちに知っておいてもらうのが大切」ということは中津川さんのアドバイスのなかにもあった大切なポイントです。

それを実践すべく、今日は支援学校の生徒さんたちに博物館を紹介します。できるだけイメージしやすいように、博物館の入り口から撮った写真（撮影：那智上智さん）と地図を見せながら順路の通りに説明していきます。植え込みがあるとか、壁の様子など、細い部分も伝えます。そして、どんな人に会うのかビデオレターで紹介してこの日を終わりました。

やべあべ学級の3人に福島県立博物館にきてもらう11月末～12月上旬は、企画展「ふくしま蕨の文化～わらって、すげえんだがら～」の開催期間中でした。福島県の旧石器時代から現代までの歴史と文化を伝える常設展示はもちろん企画展示も3人に見てもらおう！と考え、この日行った支援学校でのワークショップでは博物館紹介として蕨や企画展で展示している蕨製品と同様の

「ミノ（蓑）」や「ゲンベエ（藁靴）」「フンダワラ（雪踏俵）」などを持参しました。蕨に触ってもらったり、ミノを身につけたり、フンダワラを履いてみると、体験も織り込んだ博物館紹介。3人に博物館が伝わりと良いな、と思いながら構成しました。





▲上：一緒に荷物を運んでくださる副校長先生。
下：モニターで博物館の画像を見ながら説明します。



上：藁に触っています。▶
左下：ミノは着るのに少しコツが要るのでみんなで手伝います。
右下：履いたゲンペエ（藁靴）を見つけていました。

— 支援学校と博物館をアーティストと行ったり来たり —

今日は支援学校の生徒さん二人に、彫刻家の佐野美里さんとデザイナーの大江ようさんと一緒に展示を見学してもらうワークショップです。それぞれの興味の持てる場所を好きなように見てもらいます。目で見て理解しやすい工程表や、疲れたら休憩する場所も準備しておきました。展示室では、佐野さんと大江さんがそれぞれの生徒さんについて巡ります。声をかけながら、生徒さんのペースに合わせて見学しました。

一人の生徒さんが疲れてしまったときは、先生がすかさず声をかけてくださり休憩場所に移動。しばらく座り込んでしまいましたが、ゆっくり時間をとると展示室に戻ってくれました。帰りの時間にはまた笑顔を見せてくれてほっとした博物館部でした。

佐野さんからのご提案で、佐野さんのパートナーとなるもう一人の講師としてデザイナーの大江ようさんにもご参加いただけることになりました。大江さんは仙台市を拠点にテキスタイルをベースとしたさまざまな活動をされています。大江さんの参加は後で「なるほど！」の展開につながりました。当日は、ヤベアベ学級の3人のうち一人が

お休みとなり、二人の生徒さんと佐野さんと大江さんが組みになりました。佐野さんとリュウゴ君。大江さんとチヒロさんです。そこにさらに何人かの学芸員が加わって、2チームで館内を巡りました。リュウゴ君は展示ケースのガラスのツルツルさやレストコーナーを気に入ってくれたようです。チヒロさんは展示室の各コーナー

にある時代解説の光る文字の美しさを発見。探しながら歩いていました。展示資料以外のモノ・場にも魅力があること、リュウゴ君やチヒロさんと他の方が出会う場にミュージアムがなれることも私たちに教えてくれたワークショップとなりました。



左：駐車場から博物館までの道を、博物館紹介を振り返りながら歩きました。
右：並んで一緒に博物館へ入ります。



▲最初に 1 日の流れを説明している佐野さん。毎回お手製の工程表を用意していただきました。



◀上：リュウゴクんのペースに合わせて見学します。
下：光る文字に興味をもったチヒロさんと、それを見守る大人たち。



▲視覚に不自由のあるチヒロさんに先生が iPad を渡しました。見たいものを撮影して見るチヒロさん。



◀エントランスホールにあった企画展「ふくしま薫の文化」関連展示「ビューティフルライス」は照明装置が多くチヒロさんが見やすい、心を動かされる展示だったようです。



◀疲れて体験学習室に戻ってきたリュウゴ君。



▲ガラスケースの角に触れるリュウゴ君。ガラスのすべすべが気持ちよかったのかな。



▶レストコーナーを気に入ってくれたようです。



▲企画展示室で歌を歌ってくれたチヒロさん。軽やかな歌声にその場にいた観覧者の皆さんが拍手してくれました。



▲チヒロさん、リュウゴ君を皆でお見送り。



▲次回の支援学校でのワークショップに向けて、佐野さん、大江さん、森内さんとミーティング。今日の様子を短い映像にまとめて頂き、お休みだったコウタロウ君にも伝わるようにすることにしました。

佐野さん・大江さんと
博物館 BOX を作ろう

DATE 12/6

PLACE 福島県立会津支援学校

講師：佐野美里さん
大江ようさん（TEXT 代表）
撮影：森内康博さん+らくだスタジオ

— 支援学校と博物館をアーティストと行ったり来たり —

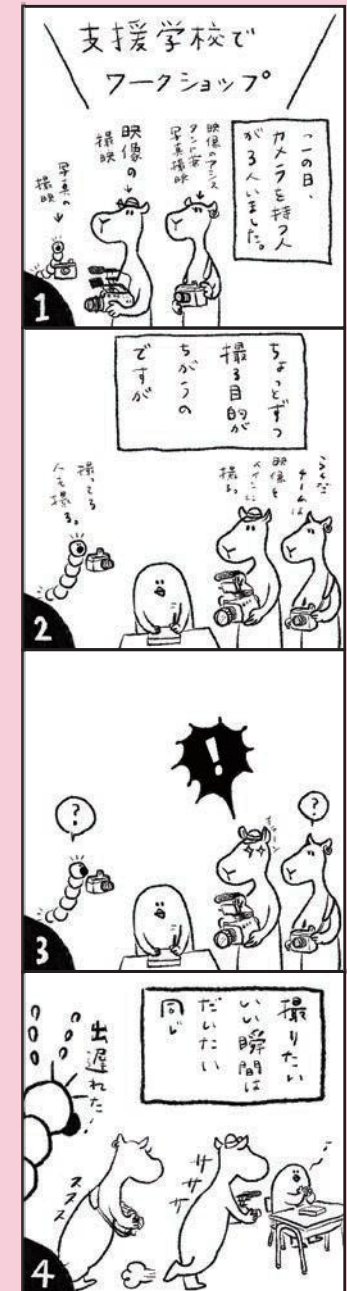
今日の会場は支援学校で生徒さんたちが日頃授業を受けている“いつもの”教室です。佐野さんと大江さんによるワークショップを行います。博物館を見学したときのふり返りのための映像をらくだスタジオの森内さんが大急ぎで制作してくれました。今日のワークショップでは自分だけの「博物館BOX」を作ります。ベースの箱は大江さんが準備してくださいました。案内板の光る文字を再現したり、好きな素材を貼ったり、中に貝殻を入れて音が出るようにしました。授業が終わった後、完成したものを手に取って嬉しそうに眺めていてくれました。

ワークショップ 2 でのヤベアベ学級の二人の様子を活かして、佐野さんと大江さんが続く支援学校でのワークショップの具体的な内容を考えてくださいました。3人それぞれが好きな博物館がの要素に近い素材で「博物館BOX」を作るプランです。リュウゴ君が気に入った展示ケースのガラスのツルツル。チヒロさんが見つけた展示

解説の光る文字の美しさ。穴の空いたスチールの展示台の触り心地。そして元から3人が好きなこと、例えばリュウゴ君が好きな「箱などを振って音を鳴らすこと」なども要素に入れながらの3人3様の博物館BOXです。好きな質感や形態を大切にしたプラン。彫刻家の佐野さん、テキスタイルに足場を置

く大江さんというお二人ならではのものでした。

ワークショップ 1 から撮影に入っている森内康博さんと森内さんが代表を務める「らくだスタジオ」の皆さんの存在も、だんだんヤベアベ学級に馴染んできたワークショップ3でした。





▲博物館 BOX の素材にするために、博物館で見たものに近いもの、藁や漆器、貝殻などを準備しました。



◀授業のはじまり。





▲丁寧な作業が得意なコウタロウ君。



◀「博物館 BOX」にライトを入れるとどう見えるか、コートを被って暗くして、一緒に確かめます。



▲中にライトを入れて光らせ、博物館で見た光る文字を再現しました。



▲上：完成した「博物館 BOX」を発表しました。
下：ワークショップが終わった後の休み時間、お気に入りの場所で「博物館 BOX」を嬉しそうに見つめるリュウゴ君。



上：ワークショップの終了後、インタビューの撮影をしました。
下：佐野さん、大江さん、お疲れ様でした。

— 支援学校と博物館をアーティストと行ったり来たり —

中津川さんと博物館を見学します。今日も、自分の見たいところをどんなふうに見てもいい日です。一回目も来てくれた生徒さんたちは、それぞれ気に入ったところへ一直線に向かいました。見学が終わってから一呼吸して、A4サイズの画用紙にクレヨンでドローイングをします。中津川さんも、一緒に見学した学芸員さんも、生徒さんが自分から手を動かしてくれるように見守りました。

ワークショップ 4 では中津川さんと博物館で過ごしました。リュウゴ君とチヒロさんが、前回博物館で見つけた好きなところを中津川さんに教えてくれる場面もありました。前回お休みだったコウタロウ君は大好きな恐竜を相談コーナーの本で見つけて、3人それぞれの時間を楽しんでくれたようです。チヒロさんが展示室にいた高校生に

「一緒に見よう！」と話しかけながら展示室を歩いていたのも印象的でした。展示室や無料空間を中津川さんと巡った後は、体験学習室でドローイング。描きながら好きな果物を教えてくれたチヒロさん。何本かのクレヨンを一度に持って虹を描いたコウタロウ君。色の塊を重ねて見せてくれたリュウゴ君。

ワークショップ終了後に中津川さんが話されていた「ドローイングは直接博物館の何かを描いたようには見えないかもしれないけど、インプットしたことがきっかけとなって別の記憶を呼び覚まして描いたりということもあるんだよね。」ということは、支援学校とミュージアムの行ったり来たりの考え方の大事なポイントになりそうです。





▲今日もお出迎えと一緒に博物館へ入ります。



▶チケットを手にはじめの会を待ちます。



▲前回作った博物館 BOX を首にかけてきてくれました。



▲お気に入りのバスを見つめるリュウゴくんを見守る中津川さん。





◀一緒に触ってみます。



▲以前にも来たことがある図書コーナーで恐竜の本を読むコウタロウ君。



▲一休みするチヒロさんとお話する中津川さん。



◀前回見つけた光る文字を今日も鑑賞します。



色を選ぶのを声をかけながら待ちます。

実況しながら

▲先生は、生徒さんの日頃の様子に合わせて画材の渡し方を工夫していました。

完成のハイタッチ▶

DATE 12/13

PLACE 福島県立会津支援学校

講師：中津川浩章さん（美術家）

撮影：森内康博さん+らくだスタジオ

— 支援学校と博物館をアーティストと行ったり来たり —

今日は中津川さんとワークショップの日です。支援学校の生活訓練室をお借りします。床に養生をして、水彩絵の具といくつかの大きさの紙を準備しました。人が寝転がれそうな大きな紙もあります。サイズの違う紙を持って生徒さんの目の前に持って行ったり、絵の具を並べたパレットを差し出して「どの色を使おうか？」と声をかけたりします。こうした立ち居振る舞いは、中津川さんの「まわりからこれをした方がいいというのを与えるのではなく、生徒さんが自分から選ぶのを待つてあげることが大切。」という想いが詰まっています。

中津川さんの支援学校でのワークショップでは、「大きな紙に絵を描く」ということだけを決め、段階を追っての流れを設けませんでした。大人が決めたステップを進むのではなく、3人自身が選んだやりたいことを時間をフルに使って行おうとしたのです。その結果いつもと違う3人に会えたことを、その日の放課後に矢部先生が教えてくれました。

歌が大好きなチヒロさんは、歌いながら歌

に合わせて刷毛を紙に叩きつけるようにして描いていました。緑、紫と好きな色を変えながら生み出された力強いタッチによる絵。そのような描き方は今回が初めてだったそうです。

これまで同じ場所にいくつかの色をぐるぐると重ねて描いていたリュウゴ君。今回はぐるぐるの線がだんだんと広がり、広い面を描きました。

それぞれの色の個性を大事にするかのよう

に単色の塊を整然と並べるのが好きなコウタロウ君。黄色、ピンク、青。いくつかの色のブロックに加えてなんと初めて複数の色を混ぜたブロックが描かれました。アーティストが関わることで個性が引き出される。アーティストとの協働が持つ可能性を実感できたワークショップとなりました。





▲授業の始まりに、博物館見学をしたときの写真を見て振り返りをしました。



▲紙を見せながら説明する中津川さん



▲真剣に絵の具を選びます。



◀大きな紙に大きな絵の具のチューブ。見ているだけで楽しくなります。

人は集中すると背中が▶
丸くなります。



▲体を起して全体を確認。
満足の仕上がりようです。



チヒロさんの膝も、小林さんの▶
手も絵の具だらけになってしま
いました。



上：「青色をどうぞ」
下：やりとりを嬉しそうに
眺める中津川さん。

なるべくワークショップの時間を多くするために、片付けは博物館部する予定でしたが、手伝ってくれました。

映像作品

ポリフォニックミュージアム

ヤベアベ学級との12月
支援学校と博物館をアーティストと
行ったり来たりした3週間

らくだスタジオの森内さんに映像作品を制作していただきました。アーティストや学芸員の皆さんと生徒さんたちとのやりとりや小さなハプニングが丁寧に切り取られ、ワークショップの空気を伝えてくれています。

中津川さんが博物館の前で生徒さんたちを待っているシーン、生徒さんたちの到着が遅れるハプニングがありました。「中津川さんは経験も知識も今回のメンバーの中で圧倒的で、そんな人でもふとしたときのハプニングにあったり、迷ったりしながらやっている瞬間。見ている人が寄り添える場面だと思ったので、撮影している時から使おうと思いました。」と森内さんが語ってくれました。そんな視点が見る人を自然と引き込む映像に仕上がっています。

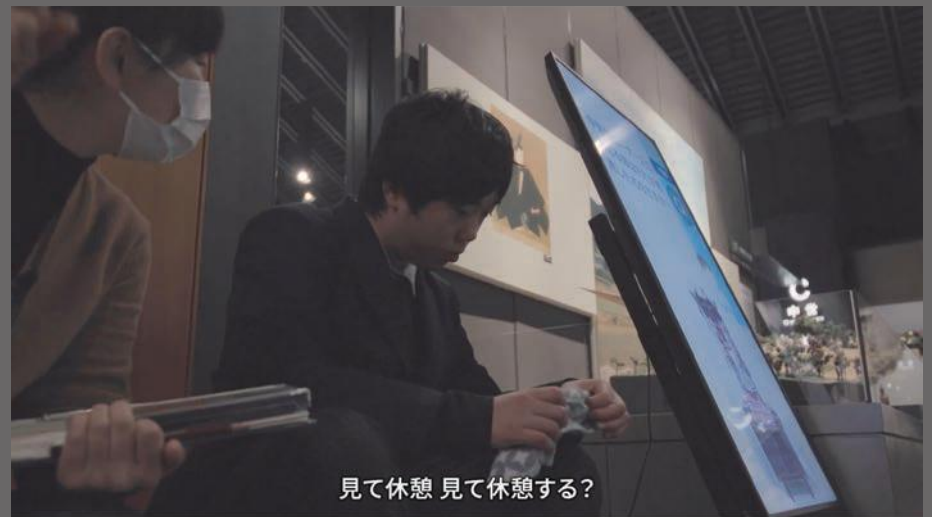
ポリフォニックミュージアム
ヤベアベ学級との12月
支援学校と博物館をアーティストと
行ったり来たりした3週間

URL <https://youtu.be/6wxxbfNXI9Q>

QR code



想定しなかったですね。



見て休憩 見て休憩する？

▲上：ハプニングが起きたときの中津川さん。
下：映像にはたくさんのごくこうした会話が詰まっています。



撮影中の森内さん▶





中津川 浩章

NAKATSUGAWA Hiroaki

表現活動研究所ラスコー代表 / 美術家 / アートディレクター

ふだん博物館や美術館といった場所で、障がいがある人を見かけることがどのくらいあるでしょうか？ 残念ながら障がいがある人にとってミュージアムはまだまだ遠い場所です。建物のバリアフリー化は進んでいますが、それでもからだが不自由な方には不便なことが多いはず。混んでいるときにはとくに車椅子ではほかの観覧者に迷惑がかかるのではないかと気を遣う。自閉症やダウン症など知的に障がいがある方が意図せずに展示物に触ってしまったり、ふとしたことでパニックになって驚かれたり、周りから見れば突然の意味不明の行動が怪訝に思われることも。盲や聾の方も、それぞれの特性があることによってミュージアムという場所の敷居は高く、けっして開かれているとは言い難いのが現実です。

企画する側も、マイノリティよりもマジョリティに照準を合わせて展覧会を構成することになりがちです。たとえば場内の導線が複雑でとまどってしまうとか、作品のキャプションが読み取れないとか、ライティングの光が目に入ってきて不安になるとか、障がいのある人にとってはそうしたことも見えない壁になりえます。どんな人にとっても開かれ、合理的配慮がなされているか。繊細で気づくのが難しい、すぐには解決できない複雑で多様な問題が山積しています。

今回の福島県立博物館と会津支援学校との連携「ポリフォニックミュージアム アートワークショップ博物館部」は、そんな問題を解決していく取り組みの始まり、第一歩です。

特別支援学校のヤベアベ学級の3人の生徒と、それをファシリテートするアーティスト、博物館学芸員、支援学校教師が、館内を一緒に周りながらおしゃべりする。そしてそこで感じたことを題材に表現するというプログラム。二人のファシリテーターがそれぞれ異なるワークをおこなうことで、生徒たちのなかに化学変化が起き、感性を刺激します。一人ひとり感じるポイントが違うので、実施する方も多様性に富んだ臨機

応変な対応が必要になってきます。

信頼できる人たちとミュージアムに行くこと。いままで知らなかった場所がよく知っている場所になって、ここに居ても良いのだ、ここは安全な場所だと認識できること。それがまず大事なこと。そしてミュージアムには今まで見たことがないもの、面白いもの、ユニークなものがいっぱいある。それに出会ってわくわくすること。心や気持ちの動きを感じてほしいのです。

近年、障がいがあるアーティストが注目され評価されるようになり、作品や表現活動はさまざまな形で外へと向かって発信され、アウトプットは確かに増えました。けれどそれに比べてインプットの機会かというとまだまだ少ない。ミュージアムに出かけて、初めて見るものに驚いたり、美しいものに感動したり、不思議なものに遭遇したり、好きになったり嫌いになったり。心を動かし人生を豊かにする。支援教育の場でそうした具体的な事物に触れるインプットの機会を持つことはとても大事なことだと思います。

“ミュージアムはみんなのもの” —設備や仕組みなどのハードを整えることは必要ですが、ハードを本当に生かすためには、運営し受け入れる人たちの心の在り方とそれが表れる実践が重要になります。障がいがある人が見えないハードルを乗り越えて未知の場所へ訪れるのだとすれば、迎える側にとっても障がいがある人たちの行動の意味は謎だらけです。やさしい声掛けやちょっとしたアイコンタクトがきっかけになって、障がいがある人にとってそこが安心できる場所に変わり、迎える側にとって謎であった障がいがある人たちの行動の意味が少しだけ解ってくる。車椅子の人たちの目線が見えるようになる。そこに対話が生まれれば、謎は少しずつ解け理解できるようになる。わからなければみんなで考え

る。それを繰り返すことで館内の空気は変わっていくでしょう。どうしても答えが見つからないときはこれからの課題として博物館、支援学校、保護者で共有していけば、やがて社会の財産になっていきます。それを積み重ねながらミュージアムが中心になって町全体がインクルーシブに変化していくこと。このような試みを公立の博物館が始めることの意義は大きいと思います。そして福祉や教育からではなく文化のなかからそのような動きがあることが、多様性社会を実現すべき未来にとって重要な意味を持つのだと思います。

“どうしても答えが見つからないときはこれからの課題として博物館、支援学校、保護者で共有していけば、やがて社会の財産になっていきます。”





佐野 美里

SANO Misato

彫刻家

デザイナーの大江ようさんと一緒にステージ02の博物館鑑賞と、ステージ03の支援学校でのワークショップを担当しました。今回のワークショップのねらいは、博物館から「生徒たちに博物館を好きになってもらいたい」、先生たちから「学校だけではなく地域の方々との繋がりを」でした。そのことを受け私たちは、生徒たちの視点に立って博物館を捉え、ステージ03のワークショップの内容を決めていくことにしました。

ステージ02の当日、支援学校の生徒と先生、博物館学芸員と一緒に展

示室を巡りました。生徒たちは自分の気持ちを言葉にするのが難しい時があったので、彼らの表情を見逃さないように気をつけながら視線の先を指差し「きれいだね」「すごいね」と、代わりに言語化して一緒に楽しみました。鑑賞の時間は余裕を持って取りました。じっくり鑑賞したい生徒は可能な限り心ゆくまで。休憩が必要な生徒にはクールダウンできるスペースを。生徒の実態に合わせて周囲が支援することで、無理なく過ごすことができました。彼らの視点で博物館を鑑賞することは新しい発見の連続で、壁面の光る文字、指先で叩くと良い音が出るケース、展示台に使われているスチール製の有孔ボードの穴など、彼らが見つけた「博物館」はユニークでとても魅力的でした。

翌週、学校で行ったステージ03では「どこでも博物館BOXをつくろう！」を行いました。はじめに映像で博物館を振り返り、次にそれぞれが見つけた博物館の良いところを小さなBOXで再現しました。ライトで切り文字が光るようにしたり、振ると音が鳴るようにしたり、展示台として好きなものを展示できたり、BOXは生徒に合わせて使えるようにしました。完成した「どこでも博物館BOX」は肩紐がついているので生徒たちは持ち歩かことができます。生徒の一人が「また一緒に博物館に行きたいね!」と言いました。大成功です。

私は美術大学を出てから5年間ほど、特別支援学校で担任の先生をしていました。その時の経験を活かし、ワークショップの進行は、生徒たちが見通しを持って安心して参加できるよう文字とイラストなどを用いて工程表を作ったり、言葉がけを工夫したりしました。今回、ワークショップという方法を使って博物館と学校をつなぐお手伝いをしましたが、こういった活動が多方面で増えれば、障がいのある人たちは地元で暮らしながら、外とのつながりを多く持ち、豊かな感性を広げるチャンスが増えると思いました。アーティスト（表現者）は、目には見えない多様な感情を形（作品）に残して他者に伝えるプロだと考えます。今後、福祉の知識を持つアーティスト（表現者）が増え、福祉の現場と社会の架け橋になることを願っています。



大江 よう

OOE Yo

TEXT 代表 / デザイナー

パターンリズムからコンピテンシー、モノログからダイアログ、分子的視点からモルの思考へ。いま、社会はそうした流れのもとに、これまで力をふるってきた中央集権や上意下達などといったものから、個人へと開かれはじめていると感じます。そしてその先には、それらあたらしい価値観に育まれた人が、また合流していく社会があるのでしょうか。さまざまな状況や環境に身を置く人たちが、よりその人らしく、あ

たらしい社会に合流していくためにいま出来ることはなんだろう？と、考えるきっかけとなったプログラムでした。

今回のプログラムでは、「博物館」という施設が象徴する「集めて伝える」という役割に加え、さらにそれらを「分かち合う」ことの素敵さが顕れていたと感じました。ラウンドテーブルで皆さんがおっしゃっていたように、ワークショップではどちらか一方からのアプローチで終わることなく、お互いにさまざまな気づきや感情を分かち合いながら、相互にフォローを行う場面が多々ありました。今回生まれたそうした「分かち合い」を、より広くより身近に、さらに自然発生的に行うためのこれからのフォーマットも望まれ、そんな課題を皆で共有していくことにも、とても意義がありそうです。

かつてトリンギッド族などが行っていた「ポトラッチ」（祭りを通して神々との接点を持ちながら、富の再分配や価値観の公平化を目的とした儀式）は、近代社会の資本主義的立場から「非文明的」である、と排除されたそうです。現代においてさまざまな人が、それぞれの価値観を受容しながら、相互に影響し「分かち合っ」いく未来とは、そうした近代の流れとは反対方向にあるのでしょうか？それとも、反対方向にありながら、どちらも正方向に進んでいるそれぞれの「知」のあり方なのでしょうか？

そんなことを手を動かしながら考え、また少しずつ、良い関係性に触れられるプログラムにご一緒できることを願っております。



杉本 雅昭

SUGIMOTO Masaaki

福島県立会津支援学校 副校長

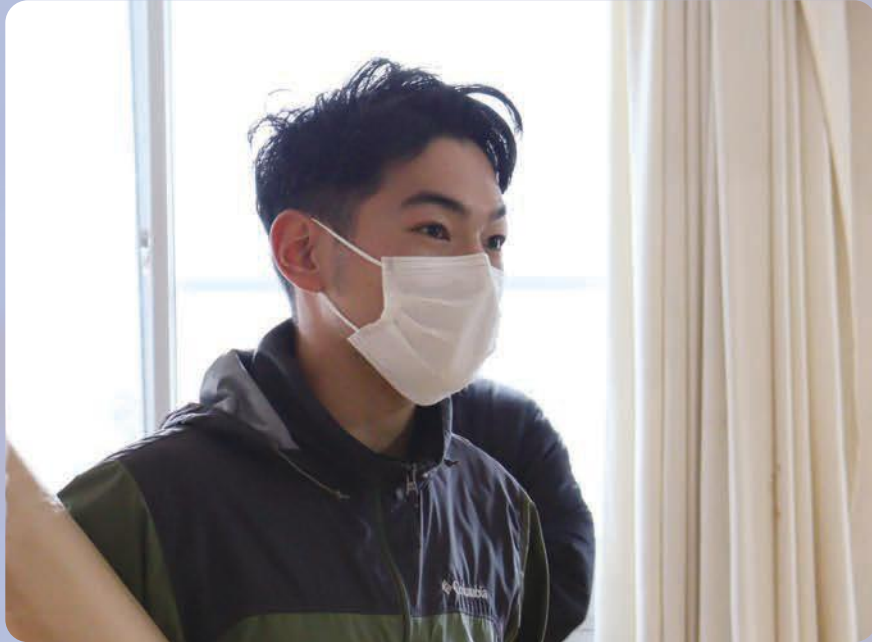
本校は、217名の児童生徒が、この歴史のある会津の地で、ふるさとを愛し、地域の中で自分らしく生き生きと生活していくことができるよう、自立と社会参加を目指し、日々の学習活動に取り組んでいる支援学校です。

学校経営・運営ビジョンには、学びを充実させる取組として、地域の資源を有効に活用した体験学習の推進を掲げています。小・中学校、高

等学校との交流及び共同学習、地域のこども園の園児との落花生の植え、収穫活動、会津若松駅や地域の福祉事業所、自然の家等でのボランティア清掃作業など、地域で共に学び、共に生きる共生社会の形成を目指した取組を進めています。

今年度、福島県立博物館との連携・協働によるポリフォニックミュージアムの取組は、地域の資源を活用し本校児童生徒の学習活動を充実させることができるとともに、本校の教育活動を広く地域の皆様方に知っていただくよい機会でもあります。アーティストの方々には制作活動の講師として直接指導していただき、高等部の該当学級3名の生徒達にとって貴重な制作活動の時間となっただけでなく、様々な方々とかかわりを通して、人間関係を広げ卒業後の社会生活に役立てるためのよい体験学習の機会となりました。初めてかかわるアーティストの方々とは短時間で良好な関係を築き、自分の意思を伝えたり、アーティストの方からの働き掛けを受け入れたり、博物館内の見学をしたり、制作活動に取組んだりしていた生徒達の姿に、学校内だけでなく、様々な場所で、様々な人々とかかわる機会を設けることの必要性和大切さを改めて感じました。

第7次福島県総合教育計画の主要施策3「学びのセーフティネットと個性を伸ばす教育によって多様性を力に変える土壌をつくる」の主な取組として「地域で共に学び、共に生きる共生社会の形成に向けた特別支援教育の充実」が掲げられています。ポリフォニックミュージアムは、誰でもが集まる場所としてのミュージアムを目指し、博物館の新たな在り方を模索する取組です。今回本校の3人の生徒は、これまでにない自由な見学やアーティストの方々との制作活動を通して、新たな博物館の利用の仕方を体験することができました。この取組が、障がいの有無に関係なく、多様な人々がお互いの個性を認め合いつながり、地域の中で共に学び、共に生きる共生社会の形成に寄与する取組になることを期待します。そのために、これからも県立博物館との連携・協働を進めていくことができればと考えます。



矢部 翔太郎

YABE Shotaro

福島県立会津支援学校 高等部 2学年4組 担任

今回、福島県立博物館の「ポリフォニックミュージアム・アートワークショップ博物館部」に参加させていただき、日常では味わえないような体験をすることができました。博物館にある展示品に生徒の感性でかわることで展示品から教材へと変わり、公共施設が学びの場へと変わる瞬間に立ち会うことができたことは貴重な学びとなりました。

今回参加させていただいた動機として、生徒達の絵具への関心や創作

意欲の高さが一番にありました。私自身生徒達の関心のあることを模索している中、絵具を使用して制作する授業では「もっとやりたい」という意欲を見ることができました。主体的に学ぶことができ、良い表情で活動している生徒達を見て、興味・関心に基づいた場面や教材を設定することが、学びに向かう意欲を引き出すことができることを改めて感じました。

博物館での観覧は生徒たちにとって目新しく映り、様々な刺激を受けることができたと思います。「光る文字」、「バスの模型」、「侍の模型」と生徒それぞれに好きな場所を見つけ、楽しみながら活動しているように見えました。またアーティストの方々や博物館の学芸員の方々と一緒に観覧する際には、三者三様のかかわり方で学ぶ姿勢が引き出される様子が伝わってきました。

校内でのワークショップでは生徒達の思いを全力で表出する場として、楽しみながら活動できてきました。3種類の筆を使い、たっぷりの絵具を使って空白を埋めるように描いたり、歌を歌いながら描いたり、力強くぐるぐる回すように描いたりして、3人の思いが現れた絵を描きあげることができました。描き終えた絵を見ても、生徒それぞれの「らしさ」が見える絵になっており、思いを表出することができた貴重な場になったと感じています。

最後に担任として、制作活動を通して自分の思いを本人なりの方法で伝えることで、周り人たちとのかかわりを広げて欲しいと願いをもって参加したワークショップですが、多くの方々の協力や理解を得ながら進めることで、生徒たちにとっても貴重な体験学習になったと感じています。ありがとうございました。



阿部 美由紀

ABE Miyuki

福島県立会津支援学校 高等部2学年4組 担当



今回、「ポリフォニックミュージアム」アートワークショップ博物館部に学級で参加させていただきました。参加を決めた当初は、生徒たちがどのように反応するのか、どのような行動をするのか、活動はうまくいくのかなど様々な不安がありました。アーティストや博物館の多くの方々に関わっていただき活動することができました。

生徒たちにとっては、タクシーに乗って出掛けるところから普段あまり行うことのない経験でした。博物館での学習は、自由に自分の興味のあるものについてじっくり時間をかけて見学や体験をすることができました。これは、学校の授業では行うことのできない貴重な学習活動となりました。その興味に基づいた体験が、学校で制作した「博物館 BOX」という形に仕上がりました。次の回には前回同様、生徒それぞれの時間の使い方で博物館を見学し、その思いを描くことができました。その後、学校で行った最後の制作活動では三人それぞれの個性が輝く作品を作り上げることができました。

新型コロナウイルス感染症が流行し、教育現場においても校外活動が制限されることもある中、今回のように博物館に行き体験し、たくさんの方々と関わることができ、改めてこのプログラムに参加させていただきとても良かったと感じています。私自身、経験や人との出会いは財産であり、宝物であると日々感じています。今回の学習活動の体験やたくさんのお会いが生徒たちの宝物になったと思います。貴重な学習の機会をいただきありがとうございました。



岡部 兼芳

OKABE Takayoshi

はじまりの美術館 館長

ビー ケアフル

私は、社会福祉法人が運営する美術館に勤めています。もともと障害のある方と関わる支援員として働いていたこともあり、今回は主に会津支援学校との連携事業に関わらせていただきました。

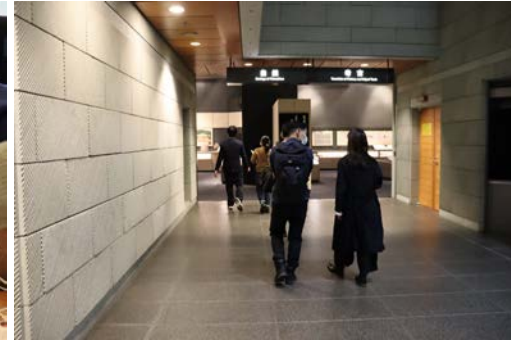
実際の取り組みが進んでいく中でも特に印象的だったことが、我々企

画側の狙いと生徒さんたちのアクションとのズレ、そしてそこから得られた気づきについてです。

展示室を訪れた生徒さんたちは、展示台や手すりなどの手触りや、内照式で文字が光る案内板がお気に入りでした。一緒に館内を巡った博物館のスタッフとアーティストは「展示物を見よう」と促すのではなく、その場その場に寄り添い、生徒さんの関心事を共有していました。これは、博物館の新たな楽しみ方が発見された一幕であり、このやり取りが、後日実施されたアーティストによる工作ワークショップに見事に反映され、生徒さんそれぞれの小さな博物館が完成しました。そしてこの一部始終は映像作家により記録・編集され、その場に居合わせなかった人も共有することができる映像として残されました。

「ケアの双方向性」という言葉があります。これはアメリカの哲学者ミルトン・メイヤロフがその著『ケアの本質』の中で書いていることから、ケアを提供することは一方的なものではなく、ケアを受ける人から多くのことを受け取ることもある、というものです。福祉の現場で働いてきた私にも覚えのあることです。ただ、ケアには「介護」や「世話をする」ということ以外に「気にかける」「関心を持つ」といった意味もあります。

誰かや、何かを気にかけて関心を持って関わることで、新しい視点や、気づきが得られるということは、医療や福祉に限ったことではありません。今回は、ケアフルなアーティストや映像作家によって、その出来事がより私たちに見える形になったのだと思います。そして博物館という場が、そのような双方向の関係が結ばれる大きな可能性を持った場であるということが発見された機会でもあったのだと思います。





事務局より

ベットの周りを機器に囲まれ、複数の点滴の管と共に静かに横たわっている少女の傍らで、町の図解地図を指さし、笑顔と柔らかな言葉で一つ一つの建物とその役割を説明している先生がいました。少女の反応は全く感じられません。「あの、この生徒さんに聞こえているのでしょうか?」「この子は、自分の意見や感想を言葉で表現することはできません。うれしい顔や悲しい顔も表情には出しません。でも、この子が聞こえていないのか、私の説明に興味がないのかはだれもわからないのです。だから教え続けたいのです」と。こんなやり取りを、ある支援学校での研修会でお聞きしたことがありました。

さて、会津支援学校高等部の3人の生徒を主役とした博物館鑑賞と表現ワークショップ、そして作品化が、アーティストと支援学校、博物館の協働で実現できました。その経過を記録として撮り、最終的に映像作品としての発表まで到達した事業が「ヤベアベ学級との12月」。3人の高校生たちはそれぞれが個性豊かです。Aさんは手の平の小指球にモノを当てて音と感触を楽しむ達人。Bさんは、色塗りの名手でペンやクレヨンの片付けのプロ。Cさんは、歌が大好きで何でも楽器に変えて演奏してしまうスペシャリスト。

一方、彼らには共通の苦手があります。言葉

で想いを伝えること、そして特に、初めての場所、初めての人とのコミュニケーションには大きな壁を感じてしまうのです。彼らとのかかわりの中で、その壁を少しでも取り除くことができるのかは私たちの大きな不安でした。

ミュージアムは、視覚からの情報が多い場所ですが、五感すべてを使って感じようとする3人に対して、ミュージアム側はどんなことを考えておかなければならないのか、その点も事前に考えさせられた大きな課題でした。答えは簡単には見出せそうにありませんでした。そこで、悩むことに時間をかけるならやってみることを大切に、歩みだしました。

3人の生徒たち、彼らにかかわる3人のアーティストたちと一緒に、学校と、博物館を行ったり来たりした3週間。3人の生徒の歩く速さや立ち止まった時の目線、モノを触っている時の様子等、隣で同じ歩調で同じ時の流れを感じながら過ごすことで感じるものは少なくありませんでした。その一つは、言葉や表面に現れている様子だけで安易に判断しがちな私たちは、博物館を訪れる障がいのある人が、平均的な来館者とは異なる楽しみを発見することができることを理解できていなかったということです。

アーティストが関わることで臨機応変な対応が生徒たちを安心させ、個々の創造性が引き出

され、大人を魅了する音であったり、配色であったり力強い筆の動きが作品として生まれました。また、この3週間の活動を映像作家が丁寧に記録し、映像作品として完成しました。多くの皆さまにこの映像作品をご覧いただき、障がいのある人がミュージアムをどう楽しんでいるかの一例を知っていただき、ミュージアムが人とモノの出会いばかりではなく、人と人の出会いの場の可能性を持っていることを共有できたらと願っております。

会津支援学校をあと1年で卒業し社会人になる3人の生徒。社会に出て生活の活動範囲を広げていくために、公共の場である博物館は何かできるのではないだろうか、彼らから博物館が学ぶことがあるのではないかとの思いを支援学校の先生方と共有したことからスタートした事業でした。彼らに与えることができた経験等よりも実際に彼らから教えられたことの方が大きい事業になりました。2年後3年後のある日、彼ら3人の誰かがレストコーナーの椅子に座り、お気に入りの壁を手で触っていたり、相談コーナーで恐竜の図鑑を開いていた、体験学習室で鼻歌を歌っている姿がこの博物館で見かけることができれば、どれほどうれしいことでしょう。

講師プロフィール

佐野 美里

彫刻家。支援学校勤務後、彫刻家として活動。自刻像を作品として自分の考えや内面性を解像度高く具現化する方法として犬の姿を借りて表現している。支援学校勤務の経験から障がいをもつこども達の特性を熟知している。

大江 よう

現代美術家のアシスタント・アパレルメーカーを経て、テキスト・テキスタイルのデザイン・製造・販売等を行う「TEXT」代表。メタポップユニット「Frasco」の衣装担当、ファブリックブランド「LAWN」運営などを手掛ける。

中津川浩章

美術家として制作活動をしつつ、多様な分野で社会とアートとの関係性を問い直す活動に取り組む。障がい者のためのアートスタジオディレクション、展覧会企画・プロデュース、キュレーションを数多く手がける。NPO 法人エイブル・アート・ジャパン理事、表現活動活動研究所ラスコー代表。

森内 康博

映像作家、映画監督。株式会社らくだスタジオ代表。東京藝術大学美術学部非常勤講師。電動車椅子サッカー「蹴る」などをはじめとしたドキュメンタリー映画の制作や、展覧会やアートプロジェクトの記録映像、また大学研究機関との映像アーカイブに携わる。

ポリフォニックミュージアムとは

ライフミュージアムネットワーク実行委員会はこれまで培ってきたネットワークを基盤として、令和3年度より新たなポリフォニックミュージアムを立ち上げました。これは ICOM 京都大会で提案された「過去と未来についての批判的な対話のための民主化を促す包摂的で様々な声に耳を傾ける空間（ポリフォニックスペース）」を各地に創出するための福島県立博物館の試みでもあります。今年度は各地域固有の歴史文化の再認識・再発見と、そこから立ち上がる課題への向き合い方の考察、その先にある未来像の創出を通じた、ミュージアム的な場の多様な展開により、持続可能な地域社会への貢献を目指します。

本事業の実施にあたって多くの方のご協力を賜りました。
本事業の趣旨に賛同してくださったアーティストのみなさま、
福島県立会津支援学校のみなさま、
また、応援してくださったみなさま、
共に「博物館」を開かれた場所にするために、考え、言葉を交わし、
プログラムを作成し、試行させていただき、
誠にありがとうございました。
そして、関わった全ての人に幸せな時間をくれた会津支援学校高等部2年4組の3人に、
心より御礼申し上げます。

文化庁令和3年度地域と共働した博物館創造活動支援事業
ポリフォニックミュージアム
アートワークショップ 博物館部 「ヤベアベ学級との12月」記録集

執筆 阿部美由紀 大江よう 岡部兼芳 佐野美里 杉本雅昭 中津川浩章 矢部翔太郎（五十音順）

編集 川延安直、小林めぐみ、塚本麻衣子、山口拡、江川トヨ子（実行委員会事務局）

テキスト・デザイン 江畑芳

テキスト （巻頭・註）小林めぐみ、（事務局より）江川トヨ子

撮影 江畑芳

印刷 北斗印刷株式会社

発行 ライフミュージアムネットワーク実行委員会
〒965-0807 福島県会津若松市城東 1-25 （福島県立博物館内）



POLYPHONIC
MUSEUM